○河口慧海のヒマラヤ紀行と植物（小林義雄） Yosio KOBAYASI: A glimpse of himalayan journey by Ekai Kawaguchi

いまさら私が慧海師の功績をここに紹介する意図はないし，その必要もない。ただ昨年機会を得て師の足跡のほんの一部分をたどり大きな感銘を受けたので，それを述べたいのである。師は仏教の原典をチベットのラッサに求めるために明治30～36年と37～大正4年の2回，インド，ネパール，チベットに入国している。人生の働きざかりの18年間をこの目的に費したのである。しかも外国人に対しては禁断の国であるチベットへ入国するには正規のルートをたどることが出来なかった。最初はダージリンまで行ったが入国をあきらめ，そこでチベット語を学び，次にネパール中部から国境のムスタンあたりまで行ったがまた引かえし，更に西進してヒマラヤを越え，ネパール，インド，チベットの国境の北側にあるカイラースにたどりつき，ここからブラマプトラ河に沿って東進し遂にラッサに潜入したのである。全行程を脚と馬にたよったことは申すまでもない。彼の体力と精神力，それに加えて行動の際の判断力は絶大なもので，私など足もとにも及ばぬほどの超人的な力であった。師はアンナプルナとダウラギリとの間を流れるカリガンダキに沿って北上しチベット国境へ出たが，このコースは現在最も人気のあるものである。つい2～3年前までは外人に許可された最北の部落はジョモソムであった。しかし師の記録にはこの地名はなく，手前のツクゼー (Tukuche)，マルハ (Marpha)，それから暫らく北上して東へ廻ってムクテナート(Muktinath)，これより山越えして河畔のカグベニの先のキミイ（福泉，今のGami)，更に進んでムスタンの手前のツアーラン (Tuarang) にたどりつき，ここで10ヶ月ほどチベット語を学び，引かえして1900年にツクゼーで暫らく滞在してラマ教を学んだ。準備が出来たところで再び北上し，カグベニとガミとの間のカリガンダキの支流 Keha Lumgpa に沿ってダウラギリの北部を越えトルホからチャルカへ出て，この辺からヒマラヤを北に越えたようである。

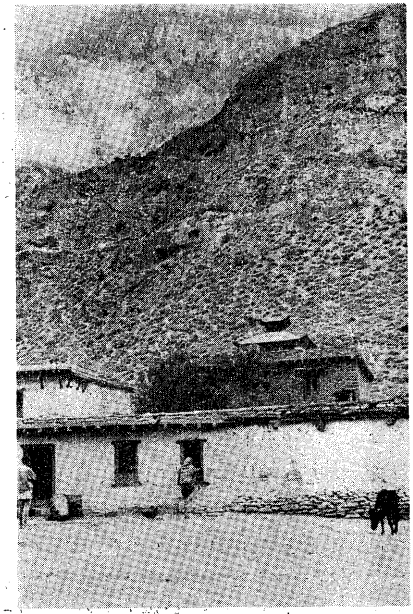

図1. ツクゼーのラマ寺.

話かわって私は1976年10月8日にツクゼーで由緒のある宿に泊った。その入口には“Remember the house of Chapal Singh & Osha”と記してあった。この部落のはずれに土垣をめぐらしたゴンパ(寺院)があ

り，前の広場にはフランスの登山隊が天幕を張っていた。私は恐らく慧海師がこの寺でラマ教を学んだことと想像し，這入ろうと試みたが門はかたく閉されていた。どうやら無人らしかった。詮方なく北進し，小規模な農業試験場のあるマルハを過ぎてジョモソムに入り Alaska Hotel と称する旅館へ泊り，ここに15日まで滞在した。宿の主人はこの部落の顔役らしく慧海師のことも伝え聞いて知って居た。彼によるとツクゼーよりもシャン (Shan) 寺院の方がずっと大規模であり，色々な施設が整って居り，仏殿，僧を養成する塾，経文や版木，仏像，マンダラの製造，経文所蔵庫，それにレストランまでもあって酒を呑ます。恐らく慧海はツクゼーに滞在中，屢々ここに来てラマ教を学んだのであろうと一人合点をした。そこで私も半ば酒に惹かれてシャンに案内して貰うことにした。寒風をつき南下すること凡そ30分，とある峠にかかると脚下にカリガンダキの支流が流れ，広い河原の先の崖上に城塞のような寺院が見えタルチョーがはためいて居た。麓の桃の林を抜けて崖上に立てば石積みの垣の中には石小屋が何軒も並び狭い通路は迷路状をなしている。先ずレストランと称する部屋に入る。何の飾りもない室の正面に食器棚があり，前にテーブルと腰掛のみ。チベット系の女子が出て来て注文に応じて酒を出す。この酒については植研 **36**(10) : 321-336 (1961) に論文を載せて置いたが，実際に味わうのは初めてであった。チャンは濁酒で酢に酸味が加わった味がし，アルコールの濃度は弱い。ロキシはこれを蒸溜したもので焼酎に似て無色，アルコールは30～35度位，真に結構であった。適当なところで切上げて本堂に参詣する。頑丈な扉を開くと高い天井の堂の正面に数体の仏像があり，仏具，太鼓など処狭しと並んでいる。四周は垂幕，壁画など。次に大広間に案内される。ここが寺の活動の中心部であり，一隅の一段高い処に主僧が坐し，多くの小僧，年配の僧，尼などがひしめいてそれぞれの仕事に熱中していた。壁面には仏壇があり，また教巻，版木の束が天井まで積まれてあった。小僧連は紙に教文を綴り，或は版木を小刀で刻み，中年の僧はマンダラを画き，主僧は教文をつぶやくような低声で読み，すべて時代離れした雰囲気に満たされていた。ミルク入りの茶を供されたが，俗人が主僧と直接に話すことが禁ぜられているようで委しいことを聞くことがはばかられた。しかし数十年の昔，若い慧海師は斯様なところでラマ教を学んだのであろう。この広間の外は中庭になって居り，これを囲むいくつかの小部屋をのぞくと仏像を粘土でつくったり，版木をつくる部屋などが目についた。

師がチベット語学習のため滞在したツアーランは現在立入り禁止である。私は止むを得ずムクチナートを訪れることにした。と言っても簡単に行ける処ではない。広い河原，徒渉，岩をくり抜いた崖道，長い坂，寒風吹きすさぶ砂漠，それは全くチベットの風光であった。ムクチナートでは廃墟になった大きな建物の2階に天幕を張った。ネパールで最も聖地とされている寺院はここよりドロヤナギや灌木の間を30分ほど登ったところにあり，ラマ寺とヒンズー寺院とが接している。約 4,000 m の高さである。ここで慧海師の旅行記を引用しよう(現代文に直した1979年版による)。“その途中，チュミク・ギャー

ツア（百の泉という意味），すなわちサンスクリット語でムクテナートと言っている霊跡に参詣した。ムクテナートというのは首の蔵め所という意味，すなわちマハーデーバの首を納めた所であると言って，いまヒンズー教では名高い霊跡とし，ヒンズー教徒も仏教徒も，ともに霊跡として尊崇している。百の泉というのは言うまでもなく，百の泉から百条の水が流れ出るというところから，そういう名をつけたので，そこにはサーラ・メーバル（土に火が燃える），チュラ・メーバル（水に火が燃える），ドーラ・メーバル（石に火が燃える）という名所があって，なかなか名高い。どんなところかと思って行って見たが，実にばかげた話で，縦60センチに横30センチくらいの岩のあいだに美しい泉がある。その水平線より少し上の岩のあいだに穴があって，その穴から火が出るのだが，その火が水の上をはって上に上がるのである。愚民がこれを

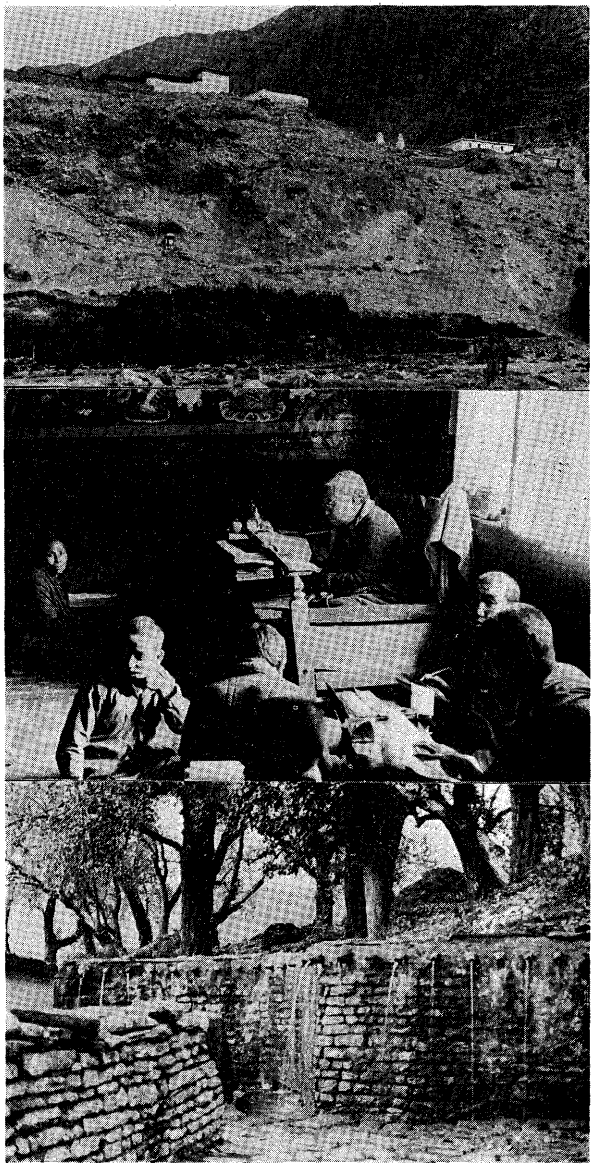

図2. 上. シャンのラマ寺. 中. 僧院内部，右上は主僧，左は尼僧，下. ムクテナート，百八個の蛇口.

見ると，まったく水の中から火が燃えて出るように見えるのである。その他もみんなそんなもので，いっこうに不思議なことはないが，この辺の山の一体の形をみると，昔は噴火山があったのではないかと思われる形跡がある"。師は宗教家であると同時に物事を科学的に見る眼も持っていた。私はまず裸足になってラマ教のゴンパに入った。薄暗い院内の正面には青や赤に彩色されたラマ仏がまつられ，その拝壇の下をのぞくと石畳の間の数ヶ所から青白い火が燃えていた。師が詣でた頃から計算しても80年間絶えることなく燃え続けていたのである。おそらく天然のメタンガスであろうが師よりも私の方が霊気を感じた。次いでヒンズー寺院へ向う。成程 108 個の蛇口が整然と並び大量の冷泉が湧き出ていた。禊場である。アンナプルナ直下の泉には盛夏の頃でも，これにうたれることは勇気を要すると思った。この附近の谷間を歩くと乾燥地でありながら湿った箇処もあり，盛りを過ぎた植物が多かった。私はなるべく微小菌類の寄生しているものを撰んで採集した。*Saxifraga, Clematis, Astragalus, Caragana, Ainsliaea, Senecio, Gentiana, Cotoneaster, Smilax,* それにエーデルワイスとマオウ等であった。水かび分離用の土壌もとり，既に数種のカビがこれから分離されている。

師がチベットに入国して最初にたどりついたのは前記のようにカイラースであったが，その後，只一人を除いて日本人の入境したことを聞かない。ここにはマナサロワール湖と並んで円丘状のカイラース山がそびえて居り，チベット人やインド人から聖山と崇められている。ここでまた師の文を引用する。"その雪峰は世界の霊場と言われるだけあって，ヒマラヤ霊山中の粋を集め，まったく天然のマンダラをなしている。その霊山の方向に対してまず私は自分の罪業を懺悔し百八遍の礼拝を行ない，それからかねて自分が作っておいた26の誓願文を読んで誓いを立てた。こういう結構な霊場に向って自分が誓いを立てられるのは何というしあわせであろうか"。師はこれよりブラマプトラ川に沿ってラッサへと数十日の旅を続けたのである。後年 Sven Hedin はこの紀行文を重視し研究したという。

このカイラースを訪れた2人目の日本人は長谷川伝次郎さんである。氏は昭和2年にここを巡礼し，美事な写真紀行集"ヒマラヤの旅"を出版した。この中には美しい植物が語られ，また写真になっている。私はいち早く本書を入手し，深く感動して，たしか昭和8年ごろ小石川竹早町のお宅へ訪れたことがある。芸術家肌の氏から親しくカイラースの話，植物の話などを伺い，採集植物などを見せて載いた。

さて慧海師はラッサに至る命がけの旅路では植物を採る余裕は無かったのが当然であるが，ラッサから経文をたずさえて公道であるシッキムを南下する途次には多少の余裕が出来たと見えて，素人ながら目に留まったものを採っている。これらは第2回のラッサ往復の際の採集品とともに京都大学其他で学術研究の役に立った。これらの採集品と長谷川氏の採ったものは共に現在科学博物館のおし葉庫に大事に保管されている。心ある方々は同館に於いて，その業績の一端を偲んで載きたい。　　(国立科学博物館)